

授業協議会「生活科」部会

協議題「気付きや思いを交流、気付きの質を高める授業の在り方」

指導担当 上越教育大学大学院・木村吉彦

1. 本単元「にじっ子おもちゃランドでたのしもう～友だちといっしょに～」の意味

次	活動（育てたい力）	資質能力育成の意義
1次「じぶんでつくろう」	自己意識に基づく 自主活動（主体性）	民主主義社会の前提
2次「みんなであそぼう」	協働意識に基づく活動 （客観性・思考力）	協調性（社会性の前提）
3次「おもちゃランドへ ようこそ」	相手意識に基づく 企画・運営活動 （他者意識・社会性）	全3次を通して 社会参画意識への基礎 （公民的資質の基礎へ向かう）

2. 「気付きの質を高める」とは

①「気付き」の定義（『小学校学習指導要領解説 生活編』4頁に基づく木村解説）

気付きとは、i)対象に対する一人一人の認識であること、ii)児童の主体的な活動によって生まれるものであること、iii)そこには知的な側面だけでなく情緒的な側面が含まれること、iv)気付きは次の活動を誘発するものであること、と明確な定義がなされた。

この中で**特に大切なのは、「一人一人の認識である」という定義**である。これは、子どもそれぞれの「主観」を大切にすることを意味する。生活科は、かつての低学年理科や社会科と違い、子ども一人一人の思いや願いを大切にすること。そのとき、主観に基づく子ども独自の気付き（主観知）を認めてあげることが重要である**＜学習の必然性＞**。実は、それがやがて客観知（科学的な認識）に結びついていく。

さらには、学年の目標において、目標1では「地域のよさに気付き」、目標2では「自然のすばらしさに気付き」、目標3では「自分のよさや可能性に気付き」という言葉が加えられ、学習活動において、一人一人の子どもにどのような認識が育つことが期待されているかが明確に示された。これらの認識の源が、すべて主観に基づく気付きにある。

②「気付き」の種類：対象への気付き 自分自身への気付き

気付きには2つの種類があると考えていただきたい。（記述を分けて書かせるのではなく）子どもの気付きの見取り＜つぶやき・発言や文章表現等＞がしやすくなる。

③「気付き」の質の高まり

1)対象への気付きとその質の高まり

自分とのかかわりで働きかけ、働き返された「ひと・もの・こと」についての気付き

(他教科の「知識・理解」に類似)のこと。主観的な知のレベルから客観的な知のレベルにまで高まることが期待される。このとき、見つける・比べる・たとえるなどは、対象への気付きの質を高める上で重要な「考える学習活動」である。

具体例) おいしいキュウリが食べたい(「食べてもいいよ」とキュウリが語った)

⇒キュウリの適切な収穫時期は？(cm,g 単位学習<算数学習>)

＝気付きの質を高める・科学的な見方・考え方の基礎を養うきっかけとなる。

一方、主観知から客観知への高まりは、地域への愛着に基づく「絵地図(生活科マップ)」づくりから、客観性のある「白地図」づくり(3年次社会)へとつながるであろう。

2)自分自身への気付きとその質の高まり

自分のやったこと(活動内容)や今の自分の気持ちの自覚・意識化から始まり、「わかるようになった自分」「できるようになった自分」つまり「成長した自分」への気付きにまで至らせたい。各単元・小単元の振り返りで気付かせることができるはずである。

主観性を大切にしつつ、自分をより冷静に見つめ、かつ成長に気付くことで全人的な意味での児童の豊かさ(豊かな人間性)を構築することができる。

例えば、「小屋掃除を上手にできるようになった自分の自覚」は、児童に自己肯定感を持たせ、生きる自信を持たせることにつながる。この生きる自信が「自立への基礎」を養うことにつながる。自分の成長と支えてくれた人々への感謝に基づく「自分史づくり」は、歴史学習の原体験であると、木村は考えている。

3. 生活科と社会科との接続

①空間認識(「地理」の視点)

地域探検で様々な場所を歩いた体験は、社会科での地図づくりに結びつく。それ以上に、町を歩いて人々の働く姿を目の当たりにし、お店の人たちと話をした経験は地域への愛着や働く人々への関心を生み、3年生以降の社会科学習へと確実に結びつく。

②時間認識(「歴史」の視点)

「成長単元」における自分史づくりを通して、子ども達は自分自身の過去の事実を確かめることから(文字通り主観的である)今の自分を見つめ直し、これまでの自分や自分を支えてくれた人達を価値付ける。さらには、これからの自分の夢や希望、願いそして、未来といったものを見いだす体験ができる。これは、歴史教育にとっての原体験を意味するのではないだろうか。社会科における歴史学習において、客観性の高い地域・国家・国際社会等の様々な歴史的事実を知ること、現在の国や都道府県、さらには地球全体の未来像を描き出す発想や思考に結びついていく。

③社会認識(「公民」の視点)

今回の「にじっ子おもちゃランド」単元に象徴されるように、「人(クラスメイト・園児)・もの(おもちゃづくり)・こと(おもちゃランド運営)」とのかかわりによる活動は、「1. 単元の意味」で述べた様に、他者との共生が求められる社会への参画意識が創り出される。自分が(主体的に)選んだ素材に基づくおもちゃづくりから始まり、クラスメイトとの活動から仲間意識や帰属意識が育ち、やがて、年下である園児との活動を企画運営することで、相手意識を高めながら主体的に活動できる。これらの活動体験によって、児童の育ちは、主観性を前提にしつつも、社会科学習が求める「公民的資質の基礎」にやがて結びつくと思われる。